

子どもの自然認識の構造と構成に関する研究 II

生活科における教授—学習論の検討

○酒井隆光^A, 小川哲男^B

SAKAI Takamitsu, OGAWA Tetsuo

昭和女子大学大学院^A, 昭和女子大学^B

【キーワード】 生活科, 気付き, 構成主義, 発達の最近接領域

1 目的

新しく改訂された学習指導要領の生活科では、科学的な見方・考え方が重視され、実践においても気付きの質の高まりが求められている。気付きを高めるためには、教授—学習過程における教師の働きかけのあり方の検討が必要である。

2 研究の内容

(1) 学習指導要領の分析

現行の学習指導要領において、「気付きは、対象に対する一人一人の認識であり、児童の主体的な活動によって生まれるもの」とされ、「そこには知的な側面だけではなく、情意的な側面も含まれる。また、気付きは次の自発的な活動を誘発するものとなる。」¹⁾と定義されている。

子どもの具体的な活動や体験の繰り返しと他者との交流が、無自覚なものから自覚された気づきへ、一つ一つの気付きから関連付けられた気づきへと気付きの質を高めることにつながる。気付きは知的認識の萌芽であり、認識の深まりとともに気づきの質も高まることから、科学的な見方や考え方の基礎を養うことにつながる。

(2) 知識や概念の再構成としての子どもの気付き

構成主義は、子ども自身がそれまでの日常生活を通して獲得してきた知識をもとに、新たな事象とのかかわりから獲得した知識を加えて再構成し、概念を自ら発展させ続けるのだとする理論である。

構成主義に立脚すれば、学習とは子ども自身の諸感覚を通して獲得した情報を、生活の中で活用できるように価値付けたり加工したりすることであり、知識体系の再構成そのものだと考えることができる。

構成主義を援用すれば、生活科は、子ども

が既存の知識に具体的な活動や体験で感じたり気付いたり考えたりしたことを加えて、知識を再構成する学習過程を大切にする教科であると説明することができる。

(3) 生活的概念と科学的概念の往復運動を契機とする気付きの獲得

生活的概念と科学的概念の往復運動は、学童期の終わりごろになってやっと科学的概念として成熟する。

子どもの学び合いによる自主的な問題解決において、困難であった論理操作は、教師の指導の下で可能となる。これがすなわち、発達の最近接領域(ZPD)である。

3 まとめ

第一に生活科における気付きの獲得は、生活的概念から科学的概念へ、科学的概念から生活的概念へと相互に往復する運動の中で生まれてくるといえる。

第二に、生活科において子どもが生活的概念に依拠しながら気付きを高めていくためには、教師の適切な指導と子ども相互による協同的活動が必須となってくる。

第三に生活科における気付きの高まりは、生活的概念と科学的概念の相互の往復運動が絶えず繰り返されることで成立する。1)

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 (2008)『小学校学習指導要領 解説生活編』日本文教出版 p4。
- 2) ヴィゴツキー, 柴田義松訳 (2001)『思考と言語』新読書社。
- 3) 小川哲男 (2007)「子どもの自然認識の萌芽の構造と構成に関する研究」『学苑』No.800 昭和女子大学。